



家康公の薨去と鎖国

こうきよ

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



おらんだ船日本へ渡海の時、何れの浦に着岸せしむるといへども、相違あるべからず候。向後、此の旨を守り、実儀無く往来せらるべし。いささか疎意あるまじく候なり。以て件の如し 慶長十四年七月二十五日

慶長十四年七月廿五日



おらんだ船日本へ渡海の時、何れの浦に着岸せしむるといへども、相違あるべからず候。向後、此の旨を守り、実儀無く往来せらるべし。いささか疎意あるまじく候なり。以て件の如し 慶長十四年七月二十五日

オランダ船日本渡航朱印状(オランダ国立公文書館所蔵)。縦46.5cm×横65cm。左肩に家康公の朱印。「おらんだ船日本へ渡海の時、何れの浦に着岸せしむるといへども、相違あるべからず候。向後、此の旨を守り、実儀無く往来せらるべし。いささか疎意あるまじく候なり。以て件の如し 慶長十四年七月二十五日」。

一六〇九年、岩和田にスペイン船が座礁する三カ月前、平戸にオランダ船が二隻入港し、国書を呈して通商を求めました。駿府城の家康公は通商を許可し平戸に商館を作することを許しました。この素早い決断には、側近のオランダ人ヤン・ヨーステンらの助言もあつたのでしよう。

同年、マカオで九州大名の有馬晴信の朱印船がポルトガル船に襲われて多数の死者を出し、さらに長崎で晴信らがポルトガル船を撃沈するなど、日本の海外進出に伴ってポルトガル権益との摩擦が表面化しました。

家康公の積極的な外交展開の一方で、海外トラブルの頻発に幕府の困惑は強まります。海外戦争が如何に困難で悲惨なものかは、文禄・慶長の役で身に沁みて経験したばかりです。そして、布教にこだわり、最強の帝国として

の過信と傲慢さのあつたスペイン、ポルトガルから、新教国オランダ、イギリスへと貿易のパートナーの選交代が急速に進められることとなります。

一六二三年、幕府はキリスト教の黙認を中止して明確な禁止令を出し、京都の教会堂を撤去します。この年はイギリス国王の書簡を受け取って通商を認めた年ですが、オランダ、イギリスはキリスト教の布教は一切しないことを国王が約束しており、この新しい貿易相手二カ国を確保したことで、スペイン、ポルトガルに配慮を重ねる必要がなくなり、幕府の禁教政策を可能にしたとも言われています。

幕府は翌年、大坂冬の陣の直前に高山右近らキリスト教徒百四十八名をマニラ、マカオに追放しました。大半が武士

でした。その一年半後に家康公は亡くなりました。その後の外交政策の進展は次のようなものです。

大型外航船の建造は、一六二三年に支倉常長の遣欧使節を乗せて行つた「サン・ファン・パウティスタ号」を最後に中止されました。

イギリスは一六二三年に平戸の商館を閉鎖し、オランダが幕末まで日本の西欧との交流の窓口となります。オランダには一六四三年以降、毎年「オランダ風説書」を提出させ、これにより幕府は世界情勢の推移をかなり正確に理解することができました。

一六三五年、幕府は日本人の海外渡航を禁止、いわゆる鎖国体制を整えました。家康公という圧倒的なカリスマが去り、幕府の存亡が最も危惧された時期でしたから、安全保障のために万全の措置が取られたと見られます。